

## 167歳の老人？を切手に描く

平 岩 道 夫

(切手評論家)

いまや日本は世界でもその名を知られる長寿国となったが、南米はコロンビアに、167歳になる老人？を描いた切手があり、収集家の間では何かと話題をにぎわしている。

切手が発行されたのは、1956年12月28日。切手に描かれているのは1789年生まれのジャービル・ベルシャさんというおじいさん。身長1メートル32センチ。体重は34キロというから、かなり標準よりも“小柄”ということになる。

おもしろいことに、この切手がでた直後、現地の新聞記者が、長生きの秘訣を聞いたところ、

「うん、そうだな、世の中のめんどろな問題にはあまりタッチしないで、うまいタバコやコーヒーをうんと飲むことだろうな。ハハハ……」

と答えたそうだ。

しかし、この問答もいささかできすぎている。というのは、切手にもこの文字が見られるし、どうやらこの“長寿切手”

「実は、コーヒーとタバコの国として知られるコロンビアの宣伝のために作られた」



ともっぱらの評判。

余談ながら、長寿村として有名なのは、ソ連のカフカズ地方、黒海の東南岸に面したアブバージャという小さな共和国で、人口40万のうち、90歳以上の老人がなんと2,000人以上いるとか……。

長寿者が多い理由について、外電は次のように伝えている。

「同地は気候が温緩、風光明媚、空気がよいこと、自然条件に恵まれているうえ、新鮮な肉類（とくに羊肉）、牛乳、果物、野菜などが豊富にあるためだ」

切手が宣伝に使われた一例である。

~~~~~  
 ご成婚記念切手のエピソード  
 ~~~~~

1958年(昭和33年)11月27日午前11時10分、全国のラジオはいっせいに臨時ニュースを流した。

「皇太子殿下、正田美智子さんとご婚約！」

もちろん各新聞社も“号外”を出すなど、大忙し——。

外国通信社も“テニスが結んだ恋”とか“粉屋の娘が未来の皇后に”などと、ハデな記事を各国へ送りつづけたが、郵政省でも国民の要望にこたえ、ご成婚記念切手を計画、宮内庁とも相談し、翌年1月13日の閣議で正式に決定をみた。

ところが、いざ切手の図案を描く時になって、いろいろと困った問題がでてきた。

これまで日本では“現存する人”を切手に描くことはせず、アメリカでもたとえ大統領といえども、生きている間は切手にしない方針のため、おふたりの肖像を描くことは、ほとんど絶望視されていた。

さらに、例え肖像を描いたとしても、まっ黒なスタンプをお顔のうゑに押ししたり、切手の裏をシタでなめてから封筒にはるなんて、おそれおおいことだ——などと反対をとねえる人も現われた。

だが郵政省では、全国の切手収集家をはじめ、大多数の国民の声を聞き入れ、郵便局員も消印には十分注意するから、とついに日本で初めての“現存する人”を描いた切手が誕生することになった。

こうしてほほえましいご夫妻の肖像を描いた10円と30円切手2種、檜扇を描いた5円と



20円切手2種の計4種が、ご成婚当日の昭和34年4月20日に発行された。

美智子妃の図案は、最初洋装だったものが、宮内庁の強い要望の結果、印刷寸前になり、和服にお召し替えになってしまった。

また、多少着付けが悪いのは、

「何しろ、切手の図案家が男性だったからね」

とはひどいことをいう人もいるものだ。

~~~~~  
 消防にちなむ切手紹介  
 ~~~~~



1984年8月23日に発行された防災にちなむ切手2種のうちの1枚で、「炎と風」を描いた40円切手。「防災切手デザインコンクール」の約5,200点の応募作品の中から、特賞に選ばれた作品を採用したものの。